JICA シニアボランティア 千葉

SVニュース千葉 第22号
2015年3月14日発行
千葉県JICAシニアボランティアの会
mytsuda_0518@yahoo.co.jp

本号目次

公開講演会講演要旨	2
青年海外協力隊50周年によせて	3
定例会報告	3
帰国報告会	3
出前講座	4-6
フェスティバル	7-8
任国事情	8-10
会員随想	11
お知らせ他	12

第18回公開講演会を開催

11月29日午後、千葉市国際交流プラザで、JICA東京国際センター地域連携課長佐藤俊也氏による講演「JICAにおける民間企業の海外展開支援」が行われました。

あいにくの荒天でしたが、会員、一般来場者約30名が参加し、定刻の13時30分にJICA千葉デスク国際協力推進員 和泉澤 浩氏の司会で開会されました。津田正臣会長の挨拶に続いて、JICA東京センター地域連絡課 佐藤 俊也課長が「JICAにおける民間企業の海外展開支援」と題した45分間の講演を行いました。佐藤氏の講演要旨は本紙第２面に掲載しています。

2012年3月の「中小企業海外展開支援大綱」改定に伴い、様々な問題を解決したい開発途上国、海外でのビジネスを実現したい日本の中小企業、途上国の発展を支援したいJICAの三者の思いを結合させる事業領域として、ODAを活用した中小企業支援を進めるとの説明がなされました。国別の支援実例では、中小企業から連携促進基礎調査の提案を受け、途上国とのマッチング支援を行い、実証活動を通じてその普及方法を検討し事業を支援したケースが紹介されました。更に、農業、水、環境、医療各分野での技術移転支援と、企業社員のグローバル化支援の内容について具体的な説明があり、JICAによる個人の海外ボランティアに加え、企業が組織として参加する新しいボランティアの仕組みの利用を呼びかけました。

特別寄稿「途上国支援のための国際協力事業」千葉県総合企画部国際課 課長 石川 徹

千葉県総合企画部国際課長の石川でございます。貴会の皆様には、日ごろより本県の事業に御理解と御協力をいただき、誠にありがとうございます。

本県では、途上国を支援するため様々な国際協力事業を行っているところですが、当課においてラオス国ビエンチャン都を対象に実施している水環境改善事業について御紹介します。これは、従前行っていたベトナム国ハノイ市での事業に引き続き、本県がこれまで培ってきた水環境分野での技術移転を図るもので、平成24年度から実施しております。

近年、ビエンチャン都は急速に都市化が進んでおり、これに伴う水質汚染が今後深刻になると予想されます。ラオスでは、排水等の規制にかかる各種法令は整備されていますが、その一方で水環境に係る調査や監視、指導等を行うための実質的な体制整備が追いついていないのが現状です。

今年度は7月にビエンチャン都の職員を本県に受け入れ、環境研究センター等で研修を行ったほか、平成26年11月及び平成27年1月に県職員をビエンチャン都に派遣し、水質モニタリングや水質分析の実務能力向上のための指導を行いました。

この事業は平成27年度も継続して実施し、同都の水環境改善を支援してまいりたいと考えております。

今後も県内の関係機関や県民の皆様と連携しながら、地方自治体としての国際協力を進めていきます。

貴会の皆様には、引き続き御支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

ラオスにおける現地調査

公開講演会講演要旨

JICAにおける民間企業の海外展開支援

独立行政法人 国際協力機構（JICA）
東京国際センター地域連携課 課長　佐藤 俊也

ODAによる中小企業等の海外支援を開始

2012年3月、日本政府による「中小企業海外展開支援大綱」改訂に伴い、『地域中小企業海外展開支援会議』にJICAも参加することになりました。これは、昨今の日本の経済状況、とりわけ中小企業を取り巻く経済状況の厳しさ、及び地域の活性化、という課題があり、これらに対応するため、中小企業の技術をODAに活用して行く、という背景があります。

もう少し具体的に言いますと、①経済のグローバル化と国内の厳しい経済状況から、企業の生き残りには新興国や開発途上国の成長を取り込むことが必要、②中小企業をはじめ日本企業の優れた技術や製品を途上国の開発に活用することで、開発途上国の開発と日本経済の活性化を両立、③地方の重視・地域の再生を通じた経済成長、中小企業対策による地域活性化は、政府の重要施策の一つ、という３つの柱があり、これら３つの柱を加味しながら、中小企業の活力を巻き込みつつ、JICAの事業として行っていく、という事です。

JICAの中小企業支援事業領域

日本企業の海外進出や輸入の支援はJETRO（日本貿易振興機構）が実施しております。JETROの事業と、JICAのこの事業との明確な違いは、①開発途上国は様々な問題を解決したい、②中小企業は、海外でのビジネスを実現したい、③JICAは、開発途上国を支援したい、という３者其々の命題があり、この三項目の結節点として、「（ア）途上国の様々な課題を解決するために、（イ）中小企業の技術を用いながら、（ウ）開発に寄与する 」事にあります。つまり、開発途上国の課題解決に寄与するために、中小企業の力を借りつつ支援する、という事が根本にあり、兎に角海外に展開したい、という中小企業に対しての支援事業では無い、という事です。

開発途上国側と日本側のメリット

また、開発途上国の課題解決の他に、前述したとおり、日本側は、中小企業の海外市場参入及び海外ネットワークの強化、日本の技術普及、地域の活性化、開発途上国側は、雇用機会の拡大、政府の予算負荷の軽減及び能力強化も見込まれ、日本側、開発途上国側双方にとって、Win-Winの関係が構築される事にもなります。

途上国の課題とそれらに有効可能な中小企業製品

開発途上国の課題は国々によって様々異なりますが、外務省が各々の国に対し「国別援助方針」を打ち出しており、このJICA事業を活用したい中小企業の方々は、主としてこの指針を参照しながら、海外展開を行いたい国々の課題に対し、自社の製品がどの分野で開発課題に寄与するのか、を考える事になります。開発途上国はご存知のとおり、人間の安全保障分野で共通した課題があり、これら課題に対応する中小企業の製品として一例を挙げれば、①環境・エネルギー・廃棄物処理分野では、バイオトイレ、雨量監視システム等、②水の浄化・水処理分野では、水質測定機材、浄水器等、③医療保健分野では、Ｘ線診断装置、分娩監視装置、歯科機器等の製品が有効と考えられております。

具体的なJICAの支援メニュー

JICAの中小企業・日本企業への海外展開の支援メニューは主として6つありますが、中小企業に特化した支援メニューは、①中小企業連携促進基礎調査「予算上限は1千万円、調査期間は最大１年間、目的は開発途上国の課題解決に貢献する中小企業の海外事業（直接進出による事業）に必要な基礎情報収集・事業計画策定」、②案件化調査「予算上限は3～5千万円、調査期間は最大１年間、目的は中小企業の製品・技術を開発途上国の課題解決へ活用する可能性を検討する」、③普及・実証事業「予算上限は１億円、調査期間は最大2年間、目的は、中小企業の製品・技術を開発途上国の課題解決へ活用する実証活動」の３つです。またボランティア事業では、企業の要望に応じ、派遣国や活動内容、派遣期間を決定し、企業向けにカスタマイズした要請を取り付け、その企業の社員をボランティアとして派遣する「民間連携ボランティア」というメニューもあります。

終わりに

以上の様に、JICAは「日本の地域も、中小企業も、途上国も元気にする」中小企業支援メニューを開始・実施しております。

昨今の日本の経済状況は厳しいものがあり、開発途上国の成長を取り込みながら日本経済を支えて行く事、そして勿論、開発途上国の発展にも寄与しながら、国境の無いグローバル化の社会において、相互依存の関係を更に進めて行く事が必要とされています。

青年海外協力隊50周年に寄せて

国際協力機構（JICA）は、世界平和に貢献すべく、日本のODAの実施機関として、ボランティア派遣による開発途上国への技術援助を行っておられます。

その重要な手段のひとつとして、1965年に発足した青年海外協力隊はその後順調に発展を続け、派遣された隊員数は延べ約4万人に達していると伺っております。

弊会を代表して、50周年の節目を迎えられたことをお慶び申し上げるとともに、今後のますますのご清祥を祈念いたします。

（津田正臣）

平成26年定例会を開催

今回で第12回目となる定例会は、11月29日（土）、千葉市国際交流プラザにおける公開講演会に引き続いて開催され、23名の会員が参加、本年度前半の活動報告と後半の活動計画を討議・確認しました。

冒頭津田正臣会長の挨拶に続いて、JICA東京国際センター地域連携課課長 佐藤俊也氏、JICA千葉デスク国際協力推進員 和泉澤　浩氏の来賓の方々からご挨拶を頂きました。

議事では酒井事務局長から平成26年度総会以降の活動概要が報告され、国際理解教育促進、広報活動について担当幹事から詳細な説明がありました。最後に及川副会長から会員異動報告があり、1名の退会と2名の入会により現時点での会員総数は95名と報告されました。閉会後、有志が「美弥和」に移動して懇親会を開催、和やかな会員交流が行われました。

定例会終了後、来賓と会員で記念撮影

第18回帰国報告会を開催

2月21日（土）午後、第18回帰国報告会を柏市のアミュゼ柏で開催しました。一般市民を含めて約75名の参加と熱心な質疑応答があり、JICAシニアボランティアの活動への関心の高まりを実感しました。

大雪で中止に追い込まれた昨年2月の報告会日とは打って変わった好天気に恵まれ、つめかけた参加者の熱気も加わって、汗ばむほどの会場となりました。今回はカンボジアから帰国の徳田稔夫氏、エチオピアからの小松秀世氏、ネパールからの後藤和徳氏、およびジャマイカからの登内 明氏の四氏が帰国報告を行いました。

徳田氏は「初めてのボランティア活動・戸惑いの中で」と題して、プノンペンにあるプレア・コソマ総合技術専門学院での土木工学の授業、カリキュラムや授業内容に関するアドバイス、学院の教師たちとの研修旅行などについて、多くのスライドを用いて報告しました。

小松氏は演題を「エチオピア・温故知新ー多くを学習させて頂きました」とし、アジスアベバの水道局での水道事業コンサルタントとしての活動報告を行いました。エチオピアの歴史や風土、文化や宗教などについても紹介、イスラムとキリスト教が共存する現実をスライドで示しました。

休憩後の報告者はカトマンズのジュナール中央農協連合会に赴任していた後藤氏で、演題は「ネパールでの忘れがたい数々の出会い」でした。ジュナールとはオレンジに似た柑橘類で、この市場開発や販売指導などの活動を報告し、さらにネパールで出会った人々を顔写真によって紹介しました。

登内氏のミッションは労働社会保障省に属し、工場や事務所などでの労働生産性を高める活動を行うことで、その演題も「ジャマイカ国における生産性向上について」でした。氏がジャマイカを去る直前には、氏の活動成果が同国に根付きつつあると実感したことなどを報告しました。

報告者：左より　徳田、後藤、小松、登内各氏

出前講座実施報告（2014年8月～2015年3月）

本年度、当会の国際理解教育講座の出前件数は総数23件に達しました。講師は常に講義技術の研鑽につとめ、出前講座事務局も依頼先ときめ細かく打ち合わせ、その要請に合致する講師選定に努力しています。今後、講座開催を企画しておられる皆様には、ぜひ当会の出前講座をご利用くださいますよう、ご案内いたします。詳細は当ページ欄外に記載の当会URLをご覧くださるか、または eメール: t.hada@jcom.home.ne.jp 電/ファクス：04-7173-1781（担当：羽田 亨）にご連絡ください。

小・中・高等学校などへの出前授業

- 中山 明子会員 「チュニジアとボルネオの人々の暮し」 於：千葉市立海浜打瀬小学校（2014年9月3日）
- 中村 時夫会員 「パラオの素敵な人たち」 於：柏市立増尾西小学校（2014年10月16日）
- 白鳥 貞夫会員 「世界一幸せの国『バヌアツ』」 於：柏市立柏第八小学校（2015年1月19日）
- 加藤 哲男会員 「アンデスの国『ボリビア』」 於：柏市立豊小学校 (2015年1月26日)
- 川奈部くに子会員 「日本人として、地球人として、一度しかない人生をどう生きるか」 於：船橋市立芝山中学校 (2014年11月13日)
- 酒井 國彦・酒井 徳子会員「世界が君達を待っている!!」 於：千葉県立八千代高等学校（2014年12月18日）
- 津田 正臣会員「国際協力の現場ー中東ヨルダンでのJICAボランティア活動」於：海上自衛隊第三術科学校（2014年9月3日）

中山会員は6年生130人を対象に、主としてチュニジアに関して国の位置、街の様子、人々の生活、習慣や言語、現地の小学校での授業などを、料理クイズなども交えて、豊富な写真資料を基にやさしい言葉で紹介しました。砂漠の砂や薔薇の花の形をした石灰石、岩塩、ウツボカズラなどの実物も持参、休憩時間に手に触れてみた生徒たちは大興奮し、活発な質問も発せられました。（＝写真１）

中村会員の授業には6年生3クラス、父兄も60人が聴講しました。授業は事前に配られた中村会員作成の学習シートに沿って進められ、日米戦を通してのパラオと日本の関係、その名残で今も話される日本語、町や人々の生活の様子などを紹介しました。JICAが国際協力して作った道路や橋などについても説明し、なぜこうした国際援助を行うのか、生徒自身で考えてほしいと語りかけて授業を締めくくりました。

白鳥会員の授業は柏市学校訪問事業の一環として行われたもので、6年生120名を対象に、バヌアツの地理や言語、自然の中で原始的な自給自足の暮らしを続けている様子をクイズを交えて紹介し、時間や約束を守る習慣が育っておらず、テレビも新聞もない中でビジネスを教えた経験を語りました。しめくくりに英国の調査機関がバヌアツ人が世界一幸福と認定した理由を説明し、物質的に恵まれている筈の日本人に幸福感の薄い人が多いのはどうしてだろうと生徒たちに問いかけました。（＝写真２）

加藤会員の授業も柏市学校訪問事業として、元JICAボリビア職員の福田さんと共同で、6年生100名に対して実施されました。加藤会員は国際協力は何のために行うのかの説明に続いて、インカやアンデスの紹介、人々の暮しやカーニバルの様子などの話をしました。南米楽器の研究者でもある福田さんは、縦笛ケーナの紹介や弦楽器チャランゴの実演で生徒たちの関心を集めました。最後に生徒代表が両氏にお礼の言葉を述べました。

川奈部会員は中学1年生83人を対象に講演、同会員の中学、高校時代の理想や目標、将来の夢に向かっての実践などを述べ、それが実現した地パラグアイとトンガの社会の現実や活動の内容、途上国での教育問題、貧困の悪循環を断つために教育の果たす役割など、クイズも交えて紹介しました。未来のある生徒たちには、自分の人生に夢や希望を持ち続け、その実現のためには何をしなければならないかを考えてほしいと話しました。(＝写真３)

酒井國彦・徳子両会員は高校1年生7学級360人を対象に、国際協力に関する日本と世界の比較、任地チュニジアでの活動内容やエピ

1

2

3

ソード、現地での生活や語学の重要性などを、写真とアラビア音楽のCDを使って紹介しました。近代の日本歴史や現在の日本を取り巻く国際情勢などにもふれ、生徒たちが積極性を保ちつつ日々研鑽して自立精神を養うことが重要であるとの話をしました。（＝写真４）

津田会員の講演は、海上自衛隊第3術科学校で今回初めて行われた講座で、国際協力取組みの現状とその理解を目的に、学校生160人を対象に実施されたものです。津田会員は国際協力の現状、シニア海外ボランティア活動としてヨルダンで行った技術移転の実際、自身が体験した現地の生活や、それらを通して得たヨルダンに対する印象を語り、ヨルダン人の日本に対する認識を紹介しました。しめくくりとして、国際協力へのスタンスとして重要なことは、相手への思いやり、人々との交流、信頼感の醸成であると強調しました。

4

公民館などへの出前講演

- 門間 通 会員 「南米コロンビアでの体育指導」 於：八千代市総合生涯学習プラザ（2014年9月28日）
- 寺田 博義会員「海外に居てわかる日本」 於：市原市南総公民館（2014年11月14日）
- 阿部 清司会員「シニア海外ボランティアに挑戦して」 於：市原市有秋公民館（2014年11月28日）
- 吉原 久雄会員「トンガ王国でのシニア海外ボランティア活動」 於：市原市五井公民館 (2014年12月5日)
- 坂出 直哉会員「異国に住んで初めてわかる日本の文化」 於：八街市中央公民館 (2015年2月4日)

門間会員の講座は市民カレッジ講座「国際ボランティアから見た世界の国々」の一環として開催され、シニア市民約40名が出席、任地コロンビアの地勢、インカやアステカの文明や歴史、気候、豊富な資源、ひと手間をかけたコーヒー栽培などの話を、民族衣装や物産の展示とともに紹介しました。現地活動の苦労話を交え、途上国の体験をもとに自国を見つめ直すことの重要性を語りました。

寺田会員の講座はシニア向けの市原市民大学講座の一環で、約50名の市民が聴講しました。寺田会員はシニア海外ボランティアへの応募動機、任地タイでのミッション、バンコクとチェンマイの人々の生活などをソフトな語り口で説明しました。タイで人々から教えられたこと、日本にいては考えもしなかったことに気付かされたことなどの話に市民は熱心に聞き入っていました。

阿部会員は「学生の目線で日本を見つめ直す」を副題として、任地アルゼンチンの風土や観光地、現地での生活の様子などを参加者の質問にも答えつつ1時間半にわたって語り、途上国でのボランティアは「あなどらず、あきらめず、あせらず」の3点が重要であると述べました。（＝写真５）

吉原会員の講座はシニア男女75名が参加、予定時間を20分延長して熱気を帯びたものになりました。シニア海外ボランティア応募動機の紹介に続き、任地トンガの食べ物、宗教、スポーツなどの国事情を写真で説明、任地でのSV活動で一番大切なことは健康維持と現地生活を楽しむ姿勢であると語りました。（＝写真６）

坂出会員の講演は、生きがい短期大学第2学年対象の「世界に目を向けよう 第3回 パプアニューギニア編」として実施されました。同国の国情や社会環境、活動内容や生活体験などの話を、随時の質疑応答を含めた対話型の進行形式で行い、「異文化交流とボランティア精神が世界を救う」とするメッセージを参加者に伝えました。（＝写真７）

5

6

7

出前講座のアンケート実施について
ご協力のお願い

当会では、出前講座が受講者によりご満足いただけるように、講座終了後に受講者の皆様にアンケートのご記入をお願いしています。

講演の全体的な印象、講義の内容、講師の説明の内容、説明の仕方、資料のわかりやすさ等を率直に記入していただき、今後の当会の出前講座の質的向上に役立てさせていただきますので、よろしくご協力の程お願い申し上げます。

出前講座担当

大学との連携講座、出前講義

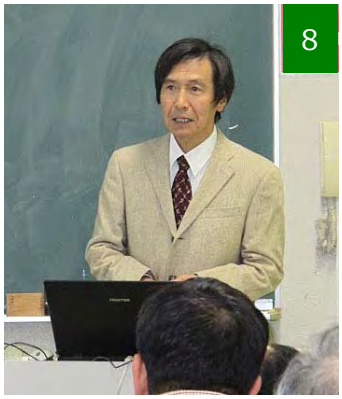
- 鈴木 伸一会員 「アフリカ (ケニア共和国) の生活と健康」 於：放送大学（2014年11月9日）
- 大久保 邦衛会員「ボランティア現場で感じた国際協力の意味と大切な事柄」 於：麗澤大学（2014年11月12日）
- 北垣 勝之会員 「異文化との出会い ー メキシコ、カンボジア、ヨルダンでの体験から」 同上（2014年11月26日）

鈴木会員は放送大学の講座「国際協力の現場」のスクーリングでアフリカ篇を担当し、18ページの詳細な資料を配布して、ケニアの市民の生活や教育、家族制度、現地語の実際などについて、多彩な写真を使って講義を行いました。また、同会員が現地で集めたデータを基に分析した「市民の健康状態」の調査から、罹患率の高い病気、高い産後死亡率、エイズやマラリアなど多くの未解決問題があることを指摘しました。（＝写真８）

麗澤大学との連携授業は外国語学部「国際交流・国際協力基礎演習」の2時限分として行われたもので、約40人の1年生が聴講しました。

大久保会員は、最初の任地チュニジアについて遊牧民と都会人との生活習慣が共存する状況を、2度目の任地フィジーについて世界一幸せと言われる人々の友好的な様子を紹介しました。同会員がSV活動の経験から得たものとして、現地での指導にあたっては、相手を否定せず相互理解を深めるよう心がけること、JICAボランティアは国際協力では縁の下の力持ち的な存在であることなどを語りました。

北垣会員は、SVとして活動した3ヵ国で触れた異文化をテーマに授業を進めました。こうした途上国では、日本が忘れてしまった「もったいない」精神が生きていて、それが独特の技術を生み出している状況をスペイン語をまじえて具体的に説明しました。しめくくりとして、「異文化理解を通して自分の道を見つけ、その道のプロを目指そう」と学生たちに語りかけました。授業は北垣会員の熱い気持ちが伝わるものとなりました。（＝写真９）


8

9

当会主催自主講座、その他の出前講座

- 白鳥 貞夫会員「IVY KIDS :世界一幸福な国『バヌアツ』を知ろう」 於：柏ビレジIVY-LABO（2014年8月25日）
- 田中 忠昭会員「開発途上国（ベトナム）の実情について」 於：浦安ベイロータリクラブ（2014年11月27日）
- 中村 時夫会員「パラオの素敵な人々ー国際理解を深める」 於：NOPパートナーとうかつ（2014年12月9日）

白鳥会員が柏ビレジで開催した表記講座は地域住民を対象とした自主講座の２回目で、白鳥会員は「今も原始の村で暮らす子供たちの元気と明るさの元は何か？」を副題に、2006年に英国のシンクタンクが発表した幸福度ランキングで「世界一」と評価されたバヌアツ人の暮らしぶりを紹介しました。幸福度の尺度として用いられた「人生満足度」×「平均寿命」÷「環境負荷」の数式の意味を考察し、貧しいながらも家族や集落共同体で助け合う中で幸福感を抱くバヌアツ人と、経済的に豊かでも焦燥感が強い日本人を比較して、情報過多の現代社会の危うさに警鐘を鳴らしました。

浦安市ロータリークラブの11月の例会に招かれた田中会員は、ベトナムでのSV活動の実際を紹介しました。任地では英語を話せる人が少なく、コミュニケーションに苦労したこと、戦略思考の欠如から品質管理を普及させるプロジェクトが容易に進まなかったこと、生鮮食品の流通が整備されておらず、生活面での不便が多かったことなどを、多くの写真を使って説明しました。(＝写真10)

中村会員は「市民大学まなび屋」に参加するシニア18名を対象に90分の講演を行い、パラオの歴史と現在の状況に加え、統治下時代の日本の貢献、ペリリュウ島の海戦跡、いまも話される日本語など、パラオと日本との歴史的な関連を紹介しました。現地の生活の中で感じたパラオ人の気取らない気質や考え方の特徴、パラオの教育制度と日本との違い、教員のレベルの問題、人々との親密な交流などにも話題が及び、30分の予定だった質疑応答がなかなか止まりませんでした。（＝写真11）

10

11

フェスティバル　地域の国際交流フェスティバル参加のレポートです

平成26年度千葉県JICAボランティア家族連絡会

於：千葉市文化センター（2014年9月13日）

2014年9月13日午後、JICA東京国際センター主催、JOCV千葉OB会共催で千葉県JICAボランティア家族連絡会が千葉市文化センターで開かれ、青年海外協力隊参加の家族約40名が出席しました。 初めにJICA担当者から赴任地の事情、帰国後の支援体制、千葉県との連携、赴任先視察旅行の説明等があり、続いて子女を青年海外協力隊員として送り出した人の体験談がありました。アフリカ、中南米、アジア、大洋州の地域別に分かれた懇談では、当会の酒井國彦幹事がアフリカグループに、坂出直哉幹事が大洋州グループに参加し、 チュニジアとパプアニューギニアでの具体的な体験を語りました。予定時間を過ぎても熱心な質疑応答が続きました。

浦安市国際交流・協力フェスティバル2014

於：JR新浦安駅前広場（2014年9月20日）

2014年9月20日、新浦安駅前広場で開催された浦安市国際交流・協力フェスティバル2014に参加しました。今回は浦安市と米国フロリダ州オーランド市の姉妹都市縁組25周年記念行事も行われました。 当会ブースでは写真パネルを展示し、JICA関連資料の配布と海外ボランティア関心者への対応を行いました。国際理解クイズを実施し、約50名の挑戦者があり、正解者に世界の小物の景品を提供しました。また、新浦安ダイエーショッパーズプラザでは、9月5日から9月20日まで、当会の活動を紹介する写真パネルを展示しました。

かしわde国際フェスタ2014

於：JR柏駅前ハウディモール（2014年9月21日）

9月21日（日）、柏駅前のハウディーモールで開催された、かしわde国際交流フェスタ2014は、好天に恵まれ、国際交流協会関係者に加え、一般の通行者も参加して大変賑わいました。アトラクションでは、ペルー人在留者の民族ダンス、ボリビア民族楽器演奏や、東葛地区シニアバンド演奏などが人気を呼びました。また姉妹都市の中国承徳市やペルー等国別ブースや、その他各団体の11ブースが出展しました。

当会のブースには来訪者が絶えず、役員と、品川洋之助、黒田昭太郎両会員が対応に勤めました。用意した各種資料が早々に捌け、ボランティアの個別相談も多く寄せられました。

国際フェスタCHIBA

於：麗澤大学　校舎あすなろ（2014年10月5日）

10月5日、国際フェスタCHIBAが麗澤大学で行われました。東葛地区での初めての開催で、JICAや当会を含め25の国際交流団体と麗澤大学関連の23団体が参加し、学生や近隣在住の外国人で賑わいました。フェスタは千葉コンベンションビューロー高柳 哲男 理事長、麗澤大学中山 理 学長の挨拶で始まり、基調講演で赤坂 清隆 元国連事務次長が「目指せグローバル人材」と呼びかけ、学生とのパネルディスカッションが行われました。

会場ではキルギス民族音楽の演奏、中国やペルー人在住者によるアトラクションが華を添えました。当会ブースでは役員に加え、濱野正紀、和田素賀子両会員が参加し、資料配布、JICA海外ボランティア相談、国際理解クイズを行いました。

成田市国際市民フェスティバル2014

於：成田国際文化会館（2014年10月5日）

10月5日（日）、成田国際文化会館1～２階と中庭テントを使用し、成田市国際市民フェスティバル2014が開催され、42団体が参加しました。

この催しは成田市市制60周年事業として開かれ、オープニングセレモニーで太鼓演奏のリズムに乗って勇壮な獅子舞が会を盛り上げました。当会は昨年に続いて２回目の参加で、パネル展示、SVニュース、会の概要、JICA応募資料、第18回公開講演会のチラシを配布し、JICAシニア海外ボランティアの募集説明を行いました。

たまたま台風の接近で雨あしが強かったにもかかわらず、実行委員会の報告では3500人の来場者がありました。

生涯学習ボランティアフェスタ2014

於：千葉市生涯学習センター（2014年11月21日）

11月21日（金）～30日（日）にわたり千葉市生涯学習センター1階アトリウムガーデンで生涯学習ボランティアフェスタ2014が開催され、17団体が参加しました。

当会はブース出展で参加、会期中役員が交代で対応して、当会の活動紹介やJICA海外ボランティアについての質問に応じました。JICA海外ボランティア活動一般についての質問に答えるなど、有意義な交流の場となりました。

ちば市国際ふれあいフェスティバル2015

於：千葉市 Qiball（2015年2月8日）

2月8日(日)、ちば市国際ふれあいフェスティバル2015が千葉市Qiballで開催され、25団体が出展しました。本フェスティバルは1994年より始まり、当会は2005年から連続して参加しております。

今年は各国の民族楽器の演奏、舞踏などもあって外国人の来場者も多く、大変賑やかな催しになりました。当会のブースに熊谷俊人千葉市長が来訪され、当会の活動に感謝と激励の言葉を頂きました。

当会は前日の会場作りから参加し、パネル展示、SVニュース、会概要、出前講座案内、JICA関係資料等の配布を行いました。またJICA海外ボランティアの個別相談には非常に多くの相談者がありました。役員と上田 義晴、上村 實の両会員が対応しました。

千葉県「通訳ボランティア養成」について

千葉県では東京オリンピックを契機として、外国人でも生活しやすい国際的に成熟した都市づくりをめざし、通訳支援体制強化を進めるため「通訳ボランティア養成検討会議」を昨年末に発足させました。当会もその委員として参画しております。

当会は世界各国に派遣され、その文化を十分に経験した会員より構成されていることより、当会に対する期待も大きいものがあります。 近い将来、会員の皆様方には、地域の国際交流協会などへの登録により、このような通訳ボランティアとしての活動の場が広がると思われます。 会員各位もその節は積極的に参加いただきたく、ご案内します。

会員動静 （敬称略）

平成27年2月1日現在での会員総数は95名、昨年9月以降の新入会員は次の2名の方々です。

・石橋 明： 赴任国 ケニア、指導科目 電子工学、
在住：山武市

・本多 浩治： 任国 ブラジル、ソーシャルワーカー（日系シニア）
在住：木更津市

平成26年5月総会以降の退会者は大格 登 １名、再派遣者は黒須 英典（メキシコ 経営管理）、浦木 仁（チリ 品質管理）、濱崎 丘（チリ 環境行政）、篠原 温雄（カンボジア 教育行政・学校運営）の4会員です。

任 国 事 情　再派遣中の会員・帰国した会員のホットな現地情報です

ドミニカ共和国

東日本大震災復興への願い

児玉 東洋

職種：工業廃水処理　2011年３月～2013年３月

2011年3月11日、駒ヶ根での派遣前研修を終えてバスに乗り込んだ直後、東日本大震災に見舞われた。その後の混乱や計画停電の中で渡航準備をし、3月24日にカリブの国へ向った。到着後、「日本人は何があっても、約束を守ってくれるのですね」という迎えの言葉に、身の引き締まる思いがした。

4月10日に、日系人協会による「追悼ミサ」が首都の教会で催された。参列者は250名。東北出身の方も多く、「白い折り鶴」で犠牲になられた方々の冥福と復興への願いをお祈りした。

4月17日に、首都の自治大学で「復興支援イベント」が開かれた。日本留学経験者、JICA研修経験者、日系人など、現地の人の共同主催で、800人以上が集まり、日本人から御礼に漢字で現地の人の名前を書いてあげた。自分はオリジナルの「ピカチュウ折り紙」を多数準備し、休むことなしに応対した。「日本を助けよう」という気持ちの強い人たちが多いことを肌で感じた1日であった。

この日は到着してまだ20日目。生活にも慣れず、ホテルから語学学校へ通っていたのだが、翌朝の新聞の1面に顔写真入りで活動の様子が掲載され、幸先のよいスタートとなった。

実は同じ日に第2の都市サンティアゴでも、青年海外協力隊員によるチャリティバザーが開催されたのだが、両方参加は無理なので、こちらにも「ピカチュウ折り紙」を届けて活用してもらった。

ところで、1956年に「ぶらじる丸」で移住してきた人たちが最初に入植したのは、ハイチ国境に近いダハボンの町である。6月5日には、ここの移住記念碑の前で、現地の方々による東日本大震災の追悼式があり、農業学校で支援バザーが催されている。

1年後の3月11日、JICAと日本大使館の後援で、首都の自治大学でシニア海外ボランティア、青年海外協力隊、大学の地震研究所、ADEJAの共同で、記念行事を開催した。ADEJAは日本留学やJICA研修経験者の集りで、1,800名の会員がいる。

会場では①追悼式典、②地震災害についての講演、③災害時と復興の様子の写真展、④被災地の児童の絵画展、⑤防災紙芝居、⑥隊員による被災地での支援体験談、⑦Ｔシャツ販売、⑧JICA活動紹介、⑨剣道演武、⑩ミニ音楽祭、⑪ヨーヨー遊び、⑫千羽鶴と折り紙実習、などの多彩な活動を行なった。

自分は紙皿とペットボトルキャップを再利用したヨーヨーを試作して持ち込んだ。その数100個。ミニ音楽祭に参加した子供たちはリサイクルに関心を示し、このプレゼントを喜んでくれた。

任期中は、廃水処理の技術者として活動する傍ら、コンスタンサ日本人会による「さくら祭り」などにも参加し、日系人や日本に理解のある方々とも交流した。JICA活動という新しい扉の向こうには、海外で日本のことを心から思う人たちとの出会いが待っていたのである。

復興支援イベントの新聞記事

ミャンマー

旧首都ヤンゴンでの停電とパソコン

高木 利公

職種：コンピュータ技術　2013年4月～2013年11月

楽しいふれあいに魅了されたボランティアも4回目、今回は初めての短期（半年）でした。鎖国の解けたヤンゴンは活気があり、商品も豊富です。人々は真面目で親日的で、教育熱心です。

配属先はJICAが2006-2011の5年間で設立したコンピュータソフト技術の研修センター（通称JICAセンター）でした。各研修生に2台のパソコン環境を持つミャンマー唯一のセンターで、ミャンマー人のみ（講師20名、研修生120名）で運営されています。このJICAセンターとインド政府援助のINDIAセンターとが別々の校舎にあり、合わせて研修所（Centre of Information & Communication Technology Training）となっています。

両センターともすでにミャンマー政府に移管され、政府の直轄管理です。派遣内容はJICAセンター講師へのJAVAプログラミング指導でした。ヤンゴンではほぼ一日おきに停電（1～3時間）です。でもスコールと同じで誰も慌てません。自宅には停電時に点灯するライト（充電池付きLED）が必須。自宅（団地）のクーラー、冷蔵庫、洗濯機等は各々に電圧保護装置（過電圧遮断

器）を設置し電圧不安定対策もします。それでも家電の寿命は短く、すぐに故障するようです。夜間の停電時は、車のヘッドライトを点けて、しのいでいる人も見ます。

研修所には自家発電機があり、停電後の給電開始までは無停電装置（UPS）によりセンター内の全デスクトップパソコンを保護するしくみです。しかし赴任時には停電すると、そのたびに「数時間かけた入力が消えた！」と教室から生徒達の声が聞こえます。パソコンの故障も多く、この年、講師達は60台／年間の修理（部品交換）をしたそうです。JICAセンターの分散バックアップ電源（各教室ごとに8台）は充電池の寿命でもう働かないためです。

INDIAセンターは集中バックアップ方式（クーラー常備のサーバー室に全充電池を収容）でうまく機能し、集中バックアップ方式の方が無停電装置維持の面では優れているのではと感じました。

私はソフトウエアでの赴任ですが、「ミャンマー政府の予算ではJICAセンターの全充電池を維持できず、停電でパソコンは全滅の危機にある。」と報告しました。帰国時に「JICA事務所が電池の交換を含む対策を行う」とのことで安心しましたが。ただ一年ぶりに講師達に会うと、まだ状況は変わっていないとのこと。うまくいっているJICAプロジェクトも設備の適切な維持管理が必須と感じます。JICAのフォローアップ支援を切に希望します。研修生の日系企業への就職も始まっています。このWin-Winの関係がずっと続いていくことを期待してます。

ベリーズ

私の配属先

濱崎　丘

職種：固形廃棄物処理　2011年9月～2013年9月

ベリーズは中米のユカタン半島の付け根にある小国で、国土の大半は熱帯雨林の原生林であり、カリブ海側はサンゴ礁に面している。この豊かな自然を保護するため保護区を数多く設けているが、心ない人達により絶滅に瀕する生物種も増加しており、国家の問題となっている。ベリーズの環境保全を総轄する天然資源・環境省の下部組織となる、環境関係でも廃棄物に特化した部局である廃棄物管理機構が私の配属先であった。

携わったプロジェクト　ベリーズでは、東西を横断する高速道路沿いの地域を対象とした廃棄物管理プロジェクトが2009年から開始し、2012年5月からは最終処分場(以下処分場)等の施設の建設が始まった。建設は順調に進み在任中の2013年7月には一部施設の開所式を迎えた。

私の活動　処分場の設計、実作業上の問題点の指摘とフィードバックをカウンターパートと共に担当し、プロジェクトの良好な推進を助けた。処分場は準好気性の処分方式を採用しており、同方式の理論と留意点を伝えると共に、実作業においては、排水パイプの有孔角度（孔の位置）の変更等を行った。

雨により崩壊した側壁の補強、度量衡におけるグラム、センチメートル等の国際単位への統一、ジャケットの着用等の安全意識の向上、水、大気モニタリングシステム構築への提言等を行った。業務費で安全靴や、大気分析器の購入を行い、プロジェクト推進のため側面から助けることもできた。

生活の面では「世界の笑顔のために」プログラム展開等を初め、地域のコンサートフェスタではJOCVと共に出演した。手ぬぐい講習会を通じて日本文化の紹介を行う等各種交流会も行った。

思い出に残る事　ベリーズではごみは各家庭等の発生源で分別せず、一旦回収車でごちゃまぜの状態で処分場へ運ばれる。この処分場にはスカベンジャーと呼ばれる人達が居て、ごみの中からリサイクル可能品を即座に見分け、その種類ごとに分別して、その日の生計を立てている。新システムでは、分別作業員として正規に採用することになったが、中には不法労働者としてベリーズに来ている隣国の人もおり、その人達を敢えて職員から除外した。採

用可否通知の日、除外されたスカベンジャーは悲痛な顔でオーオーと号泣し、しばらく呆然としてその場を立ち去ろうとはしなかった。今日からの生計の道が断たれたのである。致し方のない処置であるが、その顔と泣き声が今でも私の頭の中から離れない。

ベリーズの人達 ベリーズはマヤ系、アフリカ系、ヨーロッパ系、アジア系が入り混じった人種のルツボである。公用語をスペイン語とする国の多い中南米大陸の中で、ベリーズが唯一公用語が英語であり、彼等も誇りに思っているが、現実には多くの知識人は英語以外にもしっかりスペイン語を習得している。

日常流れるTV、ラジオや多くの輸入品をみても、遠くの旧宗主国の英国より、近くのアメリカやスペイン語圏の影響が大きい。レゲエ音楽、カリビアンRUN等、独自のカリビアン文化がしっかりと根付いており、その点ではアメリカ文化もスペイン文化も人種同様、彼らの中で融合し彼等の文化となっているように思える。

いつも柔和な顔つきで笑顔が絶えなく人懐っこいベリーズの人々であるが、プライドも高く、その点は尊重して行動しなければならなかった。職場ではBGMにレゲエ音楽がかかっており、仕事一途の日本の職場風景からは想像もできなかった。

プロジェクトの仲間

会 員 随 想　会員の近況や思う事を寄稿してもらいました

トンガ王国でのシニア海外ボランティア活動余聞

吉原 久雄

SVニュース第13号に「農業政策アドバイザー」の赴任経験の拙文を披露しました。これが縁となって、ある大手教育、生活事業会社より、高校講座の地理、産業の教材に使用するトンガ王国の日本向け農産物に関する写真提供の依頼がありました。

高校生の学習の助けになるようなので喜んで協力した結果、赴任地のカボチャ選果場でのご覧の写真が2013年、2014年版に採用されています。

残念ながら日本向けカボチャの栽培はその後の現地の事情で中断しておりますが、私のボランティア活動が思わぬところで日本青少年の学習に役立ち、喜んでいる次第です。

高校生向け地理教材のページ

ケラニア大学人文学部現代語学科文化祭

品川 雅子

スリランカのケラニヤ大学で1年間日本語教師として勤務し、1月19日帰国しました。現代語学科にはロシア語、フランス語、ドイツ語、韓国語、中国語、日本語の6学科があり、1学年50人ほどです。（英語学科は現代語学科から独立）

文化祭は2、3年に1度開かれますが、学生たちは1カ月前から練習し始め、熱中しすぎて授業を休んだ学生もいたようです。

パフォーマンスはロシアダンス、シャンソン、ファッションショー、ドイツの歌、中国のカンフー、踊り、韓国の楽器演奏、KPOPなど多彩で、それぞれの国の特徴が現れたプログラムでした。

日本語学科はソーラン節、JPOP、 AKBのダンスなどでした。

日本語学科の一年生の踊り

千葉市での10年にわたる国際貢献活動

上田 義晴

タイ、ラオスでのシニア海外ボランティア経験を活かして、千葉市で永年にわたる国際交流の推進活動、特に日本・タイ社会文化交流ネットワークに協力してきましたが、昨秋、国際交流活動を通じて公益及び地域発展に顕著な功績があったとして、平成26年度千葉市市政功労者の一人に選ばれるという名誉に浴しました。これからも皆様のご支援を得ながら、活動を続けたいと思っております。

JICAボランティア千葉県庁表敬訪問

9月19日（金）午後、佐藤　俊也JICA東京国際センター地域連携課長の引率で、平成26年度2次隊の青年海外協力隊員（JOCV）19名と、シニア海外ボランティア（SV）高田将之、山崎裕子、濱崎　丘の3氏が千葉県庁を赴任前の表敬訪問し、鶴巻　郁夫千葉県総合企画部部長から激励の言葉を受けました。また合流して出席した24年度1次隊の帰国者SV3名に慰労の言葉がありました。

12月22日（土）午後、芳賀克彦JICA東京国際センター　副所長の引率で、26年度3次隊のJOCV18名と、SVの丹羽 世之樹、箕輪　親宏、山崎　豊の3氏が千葉県庁を赴任前の表敬訪問し、浜本　憲一千葉県総合企画部千葉の魅力担当部長から激励の言葉を受けられました。

3次隊のJOCVとSVの皆さん（中央　浜本部長）

JICAボランティア春募集説明会

JICAシニア海外ボランティアおよび青年海外協力隊の春募集説明会が右記のとおり開催されます。

会場ではパネリストによるボランティア体験発表や、よろず相談があります。両日ともにシニア海外ボランティア、青年海外協力隊を合同で行います。申し込みは不要で、会場に直接お越し下さい。

日程と会場：

- 4月9日（木曜日）19時～21時
  船橋会場：船橋フェイスビル6階　きららホール
  （JR船橋南口、京成・東武各線船橋駅　徒歩1分）
- ４月25日（土曜日）14時～16時
  千葉会場：千葉市文化センター５階セミナールーム

JICA千葉デスク便り

「フェアトレードフェスタちば」のご案内

5月9日（土）、きぼーるアトリウム（千葉市）にて、「フェアトレードフェスタちば」を開催します。 これは、フェアトレードに触れることを通じて国際的な視野を広げていただくことを目的に、フェアトレードフェスタちば実行委員会主催、JICA東京共催で行います。

当日は、千葉県内でフェアトレードを扱う団体や大学生団体などが出展、またJICAブースでは、世界の課題の体験型展示を行う予定です。 現在、出展・協賛団体及び企画運営ボランティアも募集中です。お気軽にお問い合わせください。

JICA千葉デスク　和泉澤　浩

フェアトレードフェスタちばのHPは次のURLでご覧ください。
http://fairtrade-chibant.jimdo.com/

主な行事予定

当会開催・参加予定の行事です。奮ってご参加ください。

- 第19回公開講演会
  平成27年５月９日（木）千葉市国際交流プラザ
- 平成27年度通常総会
  平成27年５月９日（土）千葉市国際交流プラザ
- 国際フェスタCHIBA
  平成27年5月24日（日）神田外語大
- 第19回帰国報告会
  平成27年７月11日（土）浦安市国際センター
- かしわde国際フェスタ2015
  平成27年9月27日（日）　柏駅前ハウディモール

編集後記

前号を初めての横組みで刊行し、好意的な評価をいただいたのに気を良くして、それをひな形に第22号を編集しました。年度後半は活動案件が多く、紙面に収まりきれない記事をどう押し込むか、執筆者の筆意を気にしつつ原稿をカットしたり書き換えたりして、やっと締め切りにこぎつけました。本号は幹事5名が編集にあたりましたが、記者や編集者の経歴を持つ者は誰もおらず、シロウト集団の手作りが実態で、加えて、視力・集中力低下、語彙忘失、思い込みミスなど、自分の老化進行を噛み締めながらの作業で、印刷入稿で手を離れる時の気分は、何かと気を揉まさせられた娘がやっと嫁いだ時の感慨に、似ていないこともありません。（白鳥）

訂　正

前第21号の内容に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

第1頁及び第3頁 第18回公開講演会を第17回公開講演会に訂正。 第12頁 千葉県表敬訪問記事において、千葉県総合企画部　鶴巻郁夫部長の氏名に誤植がありました。